

# 半七捕物帳

勘平の死

岡本綺堂

青空文庫



歴史小説の老大家T先生を赤坂のお宅に訪問して、江戸のむかしの話をいろいろ伺ったので、わたしは又かの半七老人にも逢いたくなくなった。T先生のお宅を出たのは午後三時頃で、赤坂の大通りでは仕事師が家々のまえに門松を立てていた。砂糖屋の店さきには七、八人の男や女が、狭そうに押し合っていた。年末大売出しの紙ビラや立看板や、紅い提灯やむらさきの旗や、濁った楽隊の音や、甲走った蓄音機のひびきや、それらの色彩と音楽とが一つに溶け合つて、師走の都の巷にあわただしい気分を作っていた。

「もう数え日だ」

こう思うと、わたしのような閑人が方々のお邪魔をして歩いているのは、あまり心ない仕業であることを考えなければならなかった。私も、もうまっすぐに自分の家へ帰ろうと思ひ直した。そうして、電車の停留場の方へぶらぶら歩いてゆくと、往来なかでちょうど半七老人に出逢った。

「どうなすつた。この頃しばらく見えませんでしたね」

老人はいつも元氣よく笑っていた。

「実はこれから伺おうかと思つたんですが、歳の暮にお邪魔をしても悪いと思つて……」

「なあに、わたくしはどうせ隠居の身分です。盆も暮も正月もあるもんですか。あなたの方さえ御用がなけりやあ、ちよつと寄つていらつしやい」

渡りに舟というのは全くこの事であつた。わたしは遠慮なしにそのあとについて行くと、老人は先に立つて格子をあけた。

「老婢ばあや。お客様だよ」

私はいつもの六畳に通された。それから又いつもの通りに佳よいお茶が出る。旨い菓子が出る。忙がしい師走の社会と遠く懸け放れている老人と若い者とは、時計のない国に住んでいるように、日の暮れる頃までのんびりした心持で語りつづけた。

「ちようど今頃でしたね。京橋の和泉屋で素人芝居のあつたのは……」と、老人は思い出したように云つた。

「なんです。しろうと芝居がどうしたんです」

「その時に一と騒動持ち上がりましてね。その時には私も少し頭を痛めましたよ。あれは確か安政うま午年の十二月、歳の暮にしては暖い晩でした。和泉屋というのは大きな鉄かなもの物屋

で、店は具足町ぐそくちやうにありました。家中うちじゆうが芝居しばい気がいでしてね、とうとう大変な騒ぎをおつ始めてしまつたんです。え、その話をしろと云うんですか。じゃあ、又いつもの手柄話を始めますから、まあ聴いてください」

安政五年の暮は案外にあたたかい日が四、五日つづいた。半七は朝飯を済ませて、それから八丁堀の旦那（同心）方のところへ歳暮にでも廻ろうかと思つてみると、妹のお糸くめが台所の方から忙がしそうにはいつて来た。お糸は母のお民と明神下に世帯を持つて、常磐津の師匠をしているのであつた。

「姉さん、お早うございます。兄さんはもう起きていて……」

女中と一緒に台所で働いていた女房のお仙はにっこりしながら振り向いた。

「あら、お糸ちゃん、お上がんなさい。大変に早く、どうしたの」

「すこし兄さんに頼みたいことがあつて……」と、お糸はうしろをちよつと見返つた。

「さあ、おはいんなさいよ」

お糸の蔭にはまだ一人の女がしよんぼりと立っていた。女は三十七八の粹な大年増おおとしまで、お糸と同じ商売の人であるらしいことはお仙にもすぐに覺さとられた。

「あの、お前さん、どうぞこちらへ」

たすきをはずして会えしやく釈やくをすると、女はおずおずはいつて来て丁寧ていねいに会釈えしやくした。

「これはおかみさんでございますか。わたくしは下谷しもやに居ります文字清もんじきよと申します者で、こちらの文字房もんじぶさんには毎度お世話せわになつて居ります」

「いいえ、どう致いたしまして。お糸いとこそ年としが行きませんから、さぞ御厄ごやく介けいになりましょう」

この間にお糸は奥へはいつて又出て来た。文字清という女は彼女に案内されて、神経の尖とがつたらしい蒼ざめた顔を半七のまえに出した。文字清はこめかみに頭痛膏づうとうこうを貼はつて、その眼もすこし血走ちまつていた。

「兄さん。早速ですが、この文字清さんがお前さんに折り入まつて頼たのみたいことがあると云うんですがね」

お糸は仔細しさいありそうに、この蒼ざめた女を紹ひきあわ介わした。

「むむ。そうか」と、半七は女の方かたに向き直ただつた。「もし、おまえさん。どんな御用ごようだか知りませんが、私わたしに出来できそうなことだかどうだか、伺うかがつて見みようじゃありませんか」

「だしぬけに伺うかがいましてまことに恐れ入いりますが、わたくしもどうしていいか思案しあんに余あつて居ゐりますもんですから、かねて御懇意ごこんいにいたして居ゐります文字房もんじぶさんさんにお願い申まして、こちらへ押し掛かけに伺うかがいましたような訳わけで……」と、文字清は畳たたみに手てを突ついた。「お聞き

及びでございませうが、この十九日の晩に具足町の和泉屋で年忘れの素人芝居がございました」

「そう、そう。飛んだ間違いがあつたそうですね」

和泉屋の事件というのは半七も聞いて知っていた。和泉屋の家じゆうが芝居気がいで、歳の暮には近所の人たちや出入りの者共をあつめて、歳忘れの素人芝居を催すのが年々の例であつた。今年も十九日の夕方から幕をあけた。それはすこぶる大がかりのもので、奥座敷を三間ほど打ち抜いて、正面には間口三間の舞台をしつらえ、衣裳や小道具のたぐいもなかなか贅沢なものを用いていた。役者は店の者や近所の者で、チヨボ語りの太夫も下座の囃子方もみな素人の道楽者を狩り集めて来たのであつた。

今度の狂言は忠臣蔵の三段目、四段目、五段目、六段目、九段目の五幕で、和泉屋の総領息子の角太郎が早野勘平を勤めることになった。角太郎はことし十九の華奢な男で、ふだんから近所の若い娘たちには役者のようだと噂されていた。若旦那の勘平は嵌り役だと、見物の人たちにも期待された。

舞台では喧嘩場から山崎街道までの三幕をとどこおりなく演じ終つて、六段目の幕をあけたのは冬の夜の五ツ（午後八時）過ぎであつた。幾分はお追従もまじつてい

ろうが、若旦那の勘平をぜひ拝見したいというので、この前の幕があく頃から遅れ馳せの見物人がだんだんに詰めかけて来た。燭台や火鉢の置き所もないほどにぎっしり押し詰められた見物席には、女の白粉や油の匂いが咽むせるようによどんでいた。煙草のけむりも渦をまいてみなぎっていた。男や女の笑い声が外まで洩れて、師走の往来の人の足を停めさせるほど華やかにきこえた。

併しこの歡樂のさざめきは忽ち哀愁の涙に変わった。角太郎の勘平が腹を切ると生々なまなましい血潮が彼の衣裳を真っ赤に染めた。それは用意の糊のりべに紅ではなかった。苦痛の表情が凄いほどに真に迫っているのを驚嘆していた見物は、かれが台詞せりふを云いきらぬうちに舞台にがつくり倒れたのを見て、更におどろいて騒いだ。勘平の刀は舞台で用いる金貝かながい張りと思いのほか、鞆さやには本身ほんみの刀がはいっていたので、角太郎の切腹は芝居ではなかった。夢中で力一ぱい突き立てた刀の切っ先は、ほんとうに彼の脇腹を深く貫いたのであった。苦しんでいる役者はすぐに楽屋へ担ぎ込まれた。もう芝居どころの沙汰ではない。驚きと怖おそれとのうちに今夜の年忘れの宴会はくずれてしまった。

角太郎は舞台の顔をそのまままで医師の手当てをうけた。蒼白く粧つくった顔は更に蒼くなつた。おびただしく出血した傷口はすぐに幾針も縫われたが、その経過は思わしくなかった。



角太郎はそれから二日二晩苦しみ通して、二十一日の夜なかに悶き死のむごたらしい終りを遂げた。その葬式は二十三日の午すぎに和泉屋の店を出た。

きようはその翌日である。

併しこの文字清と和泉屋とのあいだに、どんな関係が結び付けられているのか、それは半七にも想像が付かなかつた。

「そのことに就いて、文字清さんが大変に口惜しがっているんですよ」と、お糸がそばから口を添えた。

文字清の蒼い顔には涙が一ぱいに流れ落ちた。

「親分。どうぞ仇を取ってください」

「かたき……。誰の仇を……」

「わたくしの伴の仇を……」

半七は煙にまかれて相手の顔をじつと見つめていると、文字清はうるんだ眼を嶮しくして彼を睨むように見あげた。その唇は癩持ちのように怪しくゆがんで、ぶるぶる顫えていた。

「和泉屋の若旦那は、師匠、おまえさんの子かい」と、半七は不思議そうに訊いた。

「はい」

「ふうむ。そりゃあ初めて聞いた。じゃあ、あの若旦那は今のおかみさんの子じゃあないんだね」

「角太郎はわたくしの倅でございます。こう申したばかりではお判りになりますまいが、今から丁度二十年前のことでございます。わたくしが仲橋の近所でやはり常磐津の師匠をして居りますと、和泉屋の旦那が時々遊びに来まして、自然まあそのお世話になって居りますうちに、わたくしはその翌年に男の子を産みました。それが今度亡くなりました角太郎で……」

「じゃあ、その男の子を和泉屋で引き取ったんだね」

「左様でございます。和泉屋のおかみさんが其の事を聞きまして、丁度こつちに子供が無いから引き取って自分の子にしたいと……。わたくしも手放すのは忌いやでしたけれども、向うへ引き取られれば立派な店の跡取りにもなれる。つまり本人の出世にもなることだと思ひまして、産れると間もなく和泉屋の方へ渡してしまいました。で、こういう親があると知れては、世間の手前もあり、当人の為にもならないというので、わたくしは相当の手当てを貰ひまして、倅とは一生縁切りという約束をいたしました。それから下谷の方へ引つ

越しまして、こんにちまで相変らずこの商売をいたして居りますが、やっぱり親子の人情で、一日でも生みの子のことを忘れたことはございませぬ。件がだんだん大きくなつて立派な若旦那になつたという噂を聴いて、わたくしも蔭ながら喜んで居りますと、飛んでもない今度の騒ぎで……。わたくしはもう気でも違いそうに……」

文字清は畳に食いつくようにして、声を立てて泣き出した。

二

「へええ。そんな内情いきさつがあるんですかい。わたしはちつとも知らなかつた」と、半七は喫のみかけていた煙管きせるをぽんと叩いた。「それにしても、若旦那の死んだのは不時の災難で、誰を怨むというわけにも行くめえと思うが……。それとも其処にはなにか理窟がありますかえ」

「はい、判つて居ります。おかみさんが殺したに相違ございませぬ」

「おかみさんが……。まあ落ち着いて訳を聞かしておくんなせえ。若旦那を殺すほどならば、最初から自分の方へ引き取りもしめえと思うが……」

訊く人の無智を嘲るあざけるように、文字清は涙のあいだに凄い笑顔を見せた。

「角太郎が和泉屋へ貰われてから五年目に、今のおかみさんの腹に女の子が出来ました。お照といつて今年十五になります。ねえ、親分。おかみさんの料りょうけん簡かんになつたら、角太郎が可愛いでしょうか。自分の生みの娘が可愛いでしょうか。角太郎に家督を譲りたいでしょうか。お照に相続させたいでしょうか。ふだんは幾ら好い顔をしていても、人間の心は鬼です。邪魔になる角太郎をどうして亡き者にしようか位のことは考え付こうじゃありませんか。まして角太郎は旦那の隠し子ですもの、腹の底には女の嫉みもきつとまじつていましょう。そんなことをいろいろ考えると、おかみさんが自分でしたか人にやらせたか、楽屋のごたごたしている隙すきをみて、本物の刀と掬すり替えて置いたに相違ないと、わたくしが疑ぐるのが無理でしょうか。それはわたくしの邪推でしょうか。親分、お前さんは何とお思いです」

和泉屋の息子にこうした秘密のあることは、半七も今までまるで知らなかった。なるほど文字清のいう通り、角太郎は継子ままごである。しかも主人の隠し子である。たとい表面は美しく自分の家へ引取つても、おかみさんの胸の奥に冷たい凝塊しじりの残っていることは否いなまれない。まして其の後に自分の実子が出来た以上は、角太郎に身代を渡したくないと思うの

も女の情としては無理もない。それが嵩じて、今度のような非常手段を企むということも必ず無いとは受け合えない。半七はこれまで種々の犯罪事件を取り扱っている経験から、人間の恐ろしいということも能く識っていた。

文字清は無論、和泉屋のおかみさんを我が子のかたきと一途に思いつめていらっしゃるしかつた。

「親分、察してください。わたくしは口惜しくつて、口惜しくつて……。いつそ出刃庖丁でも持つて和泉屋へ暴れ込んで、あん畜生をずたずたに切り殺してやろうかと思つていますが……」

彼女は次第に神経が昂ぶつて、物狂おしいほどに取りのぼせていた。ここでうっかり囁けるようなことを云つたら、病犬のような彼女は誰に啖い付こうも知れなかった。半七は逆らわずに、黙つて煙草をすつていたが、やがてしずかに口をあいた。

「すっかり判りました。ようがす。わたしが出来るだけ調べてあげましょう。如才はあるめえが、当分は誰にも内証にして……」

「いくら自分の子になつてゐるからと云つて、角太郎を殺したおかみさんは無事じゃあ済みますまいね。お上できつとかたきを取つて下さるでしょうね」と、文字清は念を押した。

「そりやあ知れたことさ。まあ、なんでもいいから私にまかせてお置きなせえ」  
文字清をなだめて帰して、半七はすぐに出る支度をした。お糸はあとに残って義姉のお  
仙と何かしやべっていた。

「兄さん。御苦労さまね。まったく和泉屋のおかみさんが悪いんでしようか」と、半七の  
出る時にお糸はうしろからささやくように訊いた。

「そりやあ判らねえ。なんとか手を着けてみようよ」

半七はまっすぐ京橋へ向った。いくら御用聞きでも、何の手がかりも無しにむやみに和  
泉屋へ乗り込んで詮議立てをするわけには行かなかった。彼は鉄物屋かなものの店さきを素通り  
して、町内の鳶頭かしらうちの家をたずねた。鳶頭はあいにく留守だということで、彼はその女房とふ  
た言三言挨拶して別れた。

「これから何処へ行ったものだろう」

往來に立つて思案しているうちに、半七はうしろから自分を追い掛けて来た人のあるの  
に気がついた。それは五十以上の町人風の男で、悪い生活の人ではないということは一と  
目にも知られた。男は半七のそばへ来て丁寧ていねいに挨拶した。

「まことに失礼でございますが、お前さんは神田の親分さんじゃありませんまいか。わ

たくしは芝の露月町ろつげつちやうに鉄物渡世をいたして居ります大和屋十右衛門と申す者でございますが、只今あの鳶頭の家へ少し相談があつて訪ねてまいりますと、鳶頭は留守で、おかみさんを相手に何かの話をして居ります所へ、お前さんがお出でになりました……。おかみさんに訊くと、あれは神田の親分さんだといふので、好い折柄と存じまして、すぐにおあとを追つてまいりましたのですが、いかがでございますようか。御迷惑でもちよいとそこからまで御一緒においで下さるわけには……」

「ようございます。お伴ともいたしましょう」

十右衛門に誘われて、半七は近所の鰻屋へはいった。小ぢんまりした南向きの二階の縁側にはもう春らしい日影がやわらかに流れ込んで、そこらにならべてある鉢植えの梅のおもしろい枝振りを、あかるい障子へ墨絵のように映していた。あつらえの着さかなの来るあいだに二人は差し向いで猪口の献酬やりとりを始めた。

「親分もお役目柄でもう何もかも御承知でございますが、和泉屋の伴も飛んだことになりました……。実はわたくしは和泉屋の女房の兄でございます。今度のことに就きました、死んだ者は今さら致し方もございませんが、さて其の後の評判でございますが……。人の口はまことにうるさいもので、妹もたいへん心配して居りますので……」

十右衛門は思い余つたように云つた。角太郎の変死については生みの母の文字清ばかりでなく、その秘密を薄々知つてゐる出入りの者のうちには、やはり同じような疑いの眼の光りをおかみさんの上に投げてゐる者もあるらしい。十右衛門はそれを苦に病んで、きょうも町内の鳶頭のところへ相談に行つたのであつた。

「どうして自身の刀と掬り替つていたか、内々それを調べて貰いたいと存じまして……。万一つまらない噂などを立てられますと、妹が実に可哀そうでございます。兄の口から斯う申すもいかがでございますが、あれはまったく正直なおとなしい女でございます、角太郎を生みの子のように大切に居りましたのに……。それを何か世間<sup>ま</sup>にありふれた継母<sup>まはは</sup>根性<sup>ねいせい</sup>のようにでも思われますのは、いかにも心外……。ともかくも葬式<sup>とむらい</sup>はきのう済みましたから、これから何とか致してその間違ひの起つた筋道を詮議いたしたいと存じて居るのでございます。その筋道がよく判りませんで、妹が何かの疑いでも受けますようでございますと、妹は氣の小さい女ですから、あんまり心配して氣違ひにでもなり兼ねません。それが不憫<sup>ふびん</sup>でございますと……」と、十右衛門は鼻紙を出して涙<sup>はな</sup>をかんだ。

文字清も氣違ひになりかかつてゐる。和泉屋のおかみさんも氣違ひになるかも知れないと云う。文字清の話がほんとうであるか、十右衛門の話がいつわりであるか。さすがの半



七にも容易に判断がつかなかった。

「芝居の晩にはおまえさんも無論見物に行つておいでになつたんでしようね」と、半七は猪口ちよこをおいて訊いた。

「はい。見物して居りました」

「楽屋には大勢詰めていたんでしようね」

「なにしろ楽屋が狭うございまして、八畳に十人ばかり、離れの四畳半に二人。役者になる者はそれだけでしたが、ほかに手伝いが大勢で、おまけに衣裳やら鬘かつらやらがそこら一ぱいで、足の踏み立てられないような混雑でございました。しかしみんな町人ばかりでございいますから、そこに大小などの置いてあるう筈はないのでございます。最初にめいめいの小道具類を渡されました時に、角太郎も一々調べて見ましたそうですから、その時には決して間違つて居りませんので……。いよいよ舞台へ出るといふ間ぎわに多分取り違つたか、掘り替えられたか。一体誰がそんなことをしたのか、まるで見当が付きませんので困つて居ります」

「なるほど」

半七は殆ど猪口をそのままにして腕を拱くんでいた。十右衛門も黙つて自分の膝の上を眺

めていた。一匹の蠅が障子の紙を忙がしそうに渡つてゆくあしおと 音が微かに響いた。

「若旦那は八畳にいたんですか、四畳半の方ですか」

「四畳半の方におりました。庄八、長次郎、和吉という店の者と一緒に居りました。庄八は衣裳の手伝いをして、長次郎は湯や茶の世話をしていたようでした。和吉は役者でございました、千崎弥五郎を勤めて居りました」

「それから、おかしなことを伺うようですが、若旦那は芝居のほかには何か道楽がありましたかえ」と、半七は訊いた。

碁将棋のたぐいの勝負事は嫌いである、女道楽の噂も聞いたことがないと、十右衛門は答えた。

「お嫁さんの噂もまだ無いんですね」

「それは内々きまつて居りますので」と、十右衛門はなんだか迷惑そうに云つた。「こうなれば何もかも申し上げますが、実は仲働きのお冬という女に手をつけまして……。尤もその女は容貌きりようも好し、氣立ても悪くない者ですから、いつそ世間に知られないうちに相当の仮親でもこしらえて、嫁の披露をってしまった方が好いかも知れないなどと、親達も内々相談して居りましたが、思いもつかない斯こんなことになってしまいました、つ

まり両方の運が悪いのでございます」

この恋物語に半七は耳をかたむけた。

「そのお冬というのは幾つで、どこの者です」

「年は十七で、品川の者です」

「どうでしょう。そのお冬という女にちよいと逢わして貰うわけには参りますまいか」

「なにしろ年は若うございますし、角太郎が不意にあんなことになりましたので、まるで気抜けがしたようにぼんやりして居りますから、とても取り留めた御挨拶などは出来ませんまいが、お望みならいつでもお逢わせ申します」

「なるだけ早い方がよろございますから、お差し支えがなければ、これからすぐに御案内を願えますまいか」

「承知いたしました」

二人は飯を食ってしまったら、すぐ和泉屋へ出向くことに相談をきめた。十右衛門が待ちかねて手を鳴らした時に、あつらえの鰻をようよう運んで来た。

十右衛門は急いで箸をとったが、半七は碌々に飯を食わなかった。彼は熱いのをもう一本持つて来てくれと女中に頼んだ。

「親分はよつぽど召し上がりますか」と、十右衛門は訊いた。

「いいえ、野暮やぼな人間ですからさっぱり飲いけないんです。だが、きようは少し飲みましようよ。顔でも紅あかくしていねえと景気が付きませんや」と、半七はにやにや笑っていた。

十右衛門は妙な顔をして黙ってしまった。

女中が持つて来た一本の徳利を半七は手酌でつづけて飲み干した。南に日をうけた暖い座敷で真昼に酒をのみ過したので、半七の顔も手足も歳まちの市まちで売える飾りの海老えびのように真っ紅あかになった。

「どうです。渋しぶつ紙しは好こい加減かへんに染しまりましたか」と、半七は熱い頬を撫なでた。

「はい、好こい色いろにおなりでございます」と、十右衛門は仕方なしに笑っていた。

そうして、こんなに酔よっている男おとこを和泉屋わいずんやへ案内あんないするのは、なんだか心こころ許ゆるまいようにも思おもったらしいが、今更いまさらことわるわけにも行いかないので、かれは勘定かんだいを払はらって半七を表あへ連れ出した。半七の足あしもとは少し乱みだれて、向むかうから鮭さけをさげて来る小僧こぞうに危あやましく突き当あり

そうになった。

「親分。大丈夫ですか」

十右衛門に手を取られて半七はよろけながら歩いた。飛んだ人に飛んだことを相談したと、十右衛門はいよいよ後悔しているらしく見えた。

「旦那。どうぞ裏口からこつそり入れてください」と、半七は云った。

しかし、まさかに裏口へも廻されまいと十右衛門は少し躊躇していると、半七は店の横手の路地へはいつて、ずんずん裏口の方へまわって行った。その足取りはあまり酔っているらしくも見えなかった。十右衛門は追うように其の後について行った。

「すぐにお冬どんに逢わしてください」

裏口からはいった半七は、広い台所を通りぬけて女中部屋を覗いたが、そこには三人のあか緒ら顔の女中がかたまっていて、お冬らしい女のすがたは見えなかった。

「お冬はどうした」と、十右衛門は障子を細目にあけると、緒ら顔は一度にこつちを振り向いて、お冬はゆうべから気分が悪いというので、おかみさんの指図で離れ座敷の四畳半に寝かしてあると答えた。その四畳半は十九日の晩、角太郎の楽屋にあてた小座敷であった。

縁伝いで奥へ通ると、狭い中庭には大きな南天が紅い玉を房々と実らせていた。ふたりは障子の前に立つて、十右衛門が先ず声をかけると、障子は内から開かれた。障子をあけたのはお冬の枕辺に坐っていた若い男で、お冬は鬢も隠れるほどに衾よぎを深くかぶっていた。男は小作りで色のあさ黒い、額の狭い眉の濃い顔であった。

十右衛門に挨拶して、若い男は早々に出て行ってしまった。あれが先刻さっきお話し申した千崎弥五郎の和吉ですと、十右衛門が云った。

衾を搔いやって蒲団の上に起き直ったお冬の顔は、半七がけさ逢った文字清の顔よりも更に蒼ざめて窶やつれていた。生きた幽霊のような彼女は、なにを聞いても要領を得るほどの挨拶はかばかしい返事をしなかった。かれは恐ろしい其の夜の悪夢を呼び起すに堪えないように、唯さめざめと泣いているばかりであった。この二、三日の春めいた陽気にだまされて、どこかで籠の鶯が啼いているのも却って寂しい思いを誘われた。

お冬の胸に燃えていた恋の火は、灰となつてもう頽くずれてしまったのかも知れない。彼女は過去の楽しい恋の記憶については、何も話そうとしなかった。しかし惨みじめな彼女の現在については、不十分なながらも半七の問いに対してきれぎれに答えた。旦那やおかみさんは自分に同情して、勿体ないほど優しくいたわってくたさると彼女は語った。店の人達のう

ちでは和吉が一番親切で、けさから店の隙を見てもう二度も見舞に来てくれたと語った。  
 「じゃあ、今も見舞に来ていたんだね。そうして、どんな話をしていたんだ」と、半七は訊いた。

「あの、若旦那がああなあってしまつては、このお店に奉公しているのも辛いから、わたしはもうお暇を頂こうかと思うと云いましたら、和吉さんはまあそんなことを云わないで、ともかくも来年の出代りまで辛抱するがいいとしきりに止めてくれました」

半七はうなずいた。

「いや、有難う。折角寝ているところを飛んだ邪魔をして済まなかつた。まあ、からだを大事にするが好いぜ。それから大和屋の旦那、お店の方へちよいと御案内を願えますまいか」

「はい、はい」

十右衛門は先に立つて店へ出て行つた。半七はよろけながら付いて行つた。さつきの酔いがだんだん発したと見えて、彼の頬はいよいよ熱<sup>ほて</sup>つて来た。

「旦那。店の方はこれでみんなお揃いなんですか」と半七は帳場から店の先をずらりと見渡した。四十以上の大番頭が帳場に坐つて、その傍に二人の若い番頭が十露盤<sup>そろばん</sup>をはじいて

いた。ほかにもかの和吉ともう一人の中年の男が見えた。四、五人の小僧が店の先で鉄釘ぎの荷を解いていた。

「はい。丁度みんな揃っているようでございます」と、十右衛門は帳場の火鉢のまえに坐つた。

半七は店のまん中にどつかりと胡坐あぐらをかいて、更に番頭や小僧の顔をじろじろ見まわした。

「ねえ、大和屋の旦那。具足町で名高けえものは、清正公様せいししょうこうと和泉屋だという位に、江戸中に知れ渡っている御大家ごたいけだが、失礼ながら随分不取締りだと見えますね。ねえ、そうでしょう。主殺しゅつしをするような太てえ奴らに、飯を食わして給金をやって、こうして大切に飼つて置くんだからね」

店の者はみんな顔をみあわせた。十右衛門も少し慌てた。

「もし、親分。まあ、お静かに……。この通り往来に近うございますから」

「誰に聞えたつて構うもんか。どうせ引廻しの出る家うちだ」と、半七はせせら笑つた。「やい、こいつら。よく聞け。てめえたちは揃いも揃つて不埒な奴だ。主殺しを朋輩に持つていながら、知らん顔をして奉公しているという法があると思うか。ええ、嘘をつけ。この



なかに主殺しの磔刑野郎がいるということは、俺がちやんと知っているんだ。多寡が守つ子見たような小女一人のいきさつから、大事の主人を殺すというような、そんな心得ちげえの大それた野郎をこれまで飼つて置いたのがそもそもその間ちげえで、この主人もよつぼどの明きめくらだ。おれが御歳暮に寒鴉の五、六羽も絞めて来てやるから、黒焼きにして持葉にのめとそう云つてやれ。もし、大和屋の旦那。おめえさんの眼玉もちつと陰つていようだ。物置へ行つて、灰汁で二、三度洗つて来ちやあどうだね」

何をいうにも相手が悪い、しかも酒には酔っている。手の着けようがないので、ただ黙つて聴いていると、半七は調子に乗つて又呶鳴った。

「だが、おれに取つちやあ仕合わせだ。ここで主殺しの科人を引つくくつていけば、八丁堀の旦那方にも好い御歳暮が出来るというもんだ。さあ、こいつ等、いけしやあしやあとした面をしていたつて、どの鼠が白いか黒いか俺がもう睨んでいるんだ。てめえ達の主人のような明きめくらだと思つと、ちつとばかり的が違つて。いつ両腕がうしろへ廻つても、決しておれを怨むな。飛んだ梅川の浄瑠璃で、縄かける人が怨めしいなんぞと詰まらねえ愚痴をいうな。嘘や冗談じゃねえ、神妙に覚悟している」

十右衛門は堪まらなくなつて、半七の傍へおすおす寄つて来た。

「もし、親分。おまえさん大分酔っていなさるようだから、まあ奥へ行ってちつとお休みなすつてはどうでございます。店先であんまり大きな声をして下さると、世間へ対して、まことに迷惑いたしますから。おい、和吉。親分を奥へ御案内申して……」

「はい」と、和吉はふるえながら半七の手を取ろうとすると、彼は横つ面をゆがむほどに撲なぐられた。

「ええ、うるせえ。何をしやがるんだ。てめえ達のような磔刑野郎のお世話になるんじやねえ。やい、やい、なんで他の面ひしを睨みやがるんだ。てめえ達は主殺しだから磔刑野郎だと云ったがどうした。てめえ達も知っているだろう。磔刑になる奴は裸馬に乗せられて、江戸じゆうを引き廻しになるんだ。それから鈴ヶ森か小塚ツ原で高い木の上へ縛り付けられると、突手つきてが両方から槍をしごいて、科人とがにんの眼のさきへ突き付けて、ありやありやと声をかける。それを見せ槍というんだ、よく覚えておけ。見せ槍が済むと、今度はほんとうに右と左の腋の下を何遍もずぶりずぶり突くんのだ」

この恐ろしい刑罰の説明を聴くに堪えないように、十右衛門は顔をしかめた。和吉も真つ蒼になった。ほかの者もみな息を嚔のんで、云い知れぬ恐怖に身をすくめていた。どの人も、死の宣告を受けたように、眼またたきもしないで少時しばしは沈黙をつづけていた。

冬の空は青々と晴れて、表の往来には明るい日のひかりが満ちていた。

#### 四

半七はとうとうそこに酔い倒れてしまった。店の真ん中に寝そべっていられては甚だ迷惑だとは思つたが、誰も迂濶うかつにさわることは出来なかつた。

「まあ、仕方がない。ちつとの間、そうして置くが好い」

十右衛門は奥へはいつて、主人夫婦と何か話していた。店のものは思い思いに自分の受け持ちの用向きに取りかかつた。やがて小半時こはんときも経つたかと思うと、今まで眠っているように見せかけていた半七は、俄かに起き上がった。

「ああ、酔つた。台所へ行つて水でも飲んで来よう。なに、おかまいなさるな。わつしが自分で行きます」

半七は台所へ行かずにまっすぐに奥へまわつた。中庭の縁からひらりと飛び降りて、大きい南天の葉の蔭に蛙のように腹這つて隠れていた。それから少し間を置いて、和吉の姿がおなじくこの縁先にあらわれた。彼は抜き足をしながら四畳半の障子の前に忍び寄つて、

内の様子を窺っているらしかった。やがて彼がそつと障子をあげた時、南天の蔭から半七が顔を出した。

障子の内では男のうるんだ声がきこえた。その声があまりに低いので、半七にはよく聴き取れなかった。しまいには焦れつたくなつたので、彼はそろそろと隠れ場所から抜け出して、泥坊猫のように縁に這い上がった。

和吉の声はやはり低かつた。しかも涙にふるえているらしかった。

「ねえ。今も云う通りのわけで、わたしは若旦那を殺した。それもみんなお前が恋しいからだ。わたしは一度も口に出したことはなかつたが、とうからお前に惚ほれていたんだ。どうしてもお前と夫婦になりたいと思ひ詰めていたんだ。そのうちにお前は若旦那と……。そうして、近いうちに表向き嫁になると……。わたしの心持はどんなだつたらう。お冬さん、察しておくれ。それでも私はおまえを憎いとは思わない。今でも憎いとは思っていない。唯むやみに若旦那が憎くつてならなかつた。いくら御主人でももう堪忍ができないよ。うな気になつて、わたしは気が狂つたのかも知れない……。今度の年忘れの芝居をちようど幸いに、日蔭町から出来合いの刀を買つて来て、幕のあく間ぎわにそつと掬り替えておくと、それが巧く行つて……。それでも若旦那が血だらけになつて楽屋へかつぎ込まれた時

には、わたしも総身に冷水を浴びせられたように悚然とした。それから若旦那がいよいよ息を引き取るまで二日二晩の間、わたしはどんなに怖い思いをしたろう。若旦那の枕もとへ行くたびに、わたしはいつもぶるぶる震えていた。それでも若旦那がいなくなれば、遅かれ速かれおまえは私の物になると……。それを思うと、嬉しいが半分、苦しいが半分で、きょうまで斯うして生きて来たが……。ああ、もういけない。あの岡っ引はさすがに商売で、とうとう私に眼をつけてしまったらしい」

彼が死んだような顔をして身をおのかしているのが、障子の外からも想像された。和吉は鼻をつまらせながら又語りつづけた。

「岡っ引は店へ来て、酔っ払っている振りをして、主殺しがこの店にいと呶鳴った。そうして、当てつけらしく磔刑の講釈までして聴かせるので、私はもうそこに居たたまれなくなつた位だ。そういう訳だから私はもう覚悟を決めてしまった。ここの店から縄付きになつて出て、牢へ入れられて、引き廻しになつて、それから磔刑になる。そんな恐ろしい目に逢わないうちに……。わたしは一と思いに死んでしまつつもりだ。くどくも云う通り、わたしは決してお前を怨恨じゃあいない。けれどもお前という者のために、わたしが斯うなつたと思つたら……。勿論お前から云つたら、若旦那を殺した仇だとも思うだろうけれど、

わたしの心持も少しは察して、どうぞ可哀そうだと思っておくれ。若旦那を殺したのはわたしが悪い。私があやまる。その代りに私が死んだあとでは、せめて御線香の一本も供えておくれ。それが一生のお願いだ。ここに給金の溜めたのが二両一分ある。これはみんなお前にあずけて行くから」

声はいよいよ陰って低くなったので、それから後はよく判らなかつたが、お冬のすすり泣きをする声もおりおりに聞えた。石町こくちょうの八ツ（午後二時）の鐘が響いた。それに驚かされたように、障子の内では人の起ちあがる気配がしたので、半七は再び南天の繁みに隠れると、縁をふむ足音が力なくきこえて、和吉は縁づたいにしよんぼりと影のように出て行つた。泥足をはたいて半七は縁に上がった。

それから再び店へ行つてみると、和吉の姿はここに見えなかつた。帳場の番頭を相手にしばらく世間話をしていたが、和吉はやはり出て来なかつた。

「時に和吉さんという番頭はさつきから見えませぬね」と、半七は空とぼけて訊いた。

「さあ、どこへ行きましたかしら」と、大番頭も首をかしげていた。「使に出たはずもないんですが……。なんぞ御用ですか」

「いえ、なに。だが、外へでも出た様子だかどうだか、ちよいと見て来てくれませんか」

小僧は奥へはいったが、やがて又出て来て、和吉は奥にも台所にも見えないと云った。

「それから大和屋の旦那はまだおいでですか」と、半七はまた訊いた。

「へえ。大和屋の旦那はまだ奥にお話をしていらつしやいますようで……」

「わたしがちよつとお目にかかりたいと、そう云つてくれませんか」

襖を閉め切つた奥の居間には、主人夫婦と十右衛門とが長火鉢を取り巻いて、昼でも薄暗い空気のなかに何かひそひそ相談をしていた。おかみさんは四十前後の人品の好い女で、眉のあとの薄いひたいを陰らせていた。半七はその席へ案内された。

「もし、旦那。若旦那のかたきは知れました」と、半七は小声で云った。

「え」と、こつちへ向いた三人の眼は一度に輝いた。

「お店の人間ですよ」

「店の者……」と、十右衛門は一と膝乗り出して来た。「じゃあ、さつきお前さんがあんなことを云つたのはほんとうなんですか」

「酔つた振りしてさんざん失礼なことを申し上げましたが、とがにん科人はお店の和吉ですよ」

「和吉が……」

三人は半信半疑の眼を見あわせているところへ、女中の一人があわただしくころ転げ込んで

来た。何かの用があつて裏の物置へはいると、そこに和吉が首を縊くつて死んでいたというのであつた。

「首を縊るか、川へはいるか、いずれそんなことだろうと思つていました」と、半七は溜息をついた。「さつき大和屋の旦那からいろいろのお話を伺つているうちに、若旦那とお冬どんのが耳に止まりました。それから芝居のときに若旦那と同じ部屋にいたという和吉のことが気になりました。若旦那とお冬どんと和吉と、この三人を結びつけると、どうしても何か色恋のもつれがあるらしく思われましたから、まずお冬どんに逢つてそれとなく訊いて見ますと、和吉が親切にたびたび見舞に来てくれるという。いよいよおかしいと思ひましたから、店へ行つてわざと聞けがしに嘸鳴りました。大和屋の旦那はさぞ乱暴なやつだとも思おぼしめ召おぼしめしたでしようが、正直のところ、わたくしは店のためを思ひましたので……。私が彼奴を縛つて行くのは雑作ぞうさくもありませんが、あいつが入しゅうろう牢しゅうろうして吟味をうける。兇状が決まつて江戸じゆうを引き廻しになる。吟味中もいろいろの引き合いでこちらが御迷惑をなさるでしようし、第一ここのお店から引き廻しの科人が出たと云われちゃあ、お店の暖簾のれんに疵が付きましようし、自然これからの御商売にも障るだろうからと存じましたから、どうかして彼奴を縄付きにしたくない。あいつとても引き廻しや磔はりつけ刑けいになるよ



りも、いつそ一と思いに自滅した方がましだろうと思いましたが、わぎとああ云つて嚇おどかしてやったんです。もう一つには、わたくしも確かに彼奴と見極めるほどの立派な証拠を握つてはいないんですから、まあ手探りながら無暗にあんなことを云つて見たんで……。もし、まったく本人に何の覚えもないことならば、ほかの人達と同じように唯聞き流してしまうでしょうし、もし覚えのあることならば、とてもじつとしてはいられまいと、こう思つたのが巧く凶にあたつて、あいつもとうとう覚悟を決めたんです。詳しいことはお冬ふゆさんからお聴きください」

三人は唾つばを嚥のんで聴いていた。

「半七さん。いや、恐れ入りました」と、十右衛門は先ず口を切つた。「科人を縛るのがお前さんのお役でありながら、自分の手柄を捨ててこの家の暖簾に疵を付けまいとして下すつた。そのお礼はなんと申していいか、それに甘えてもう一つのお願いは、どうかこれを表向きにしないで、和吉は飽くまでも乱心ということにして……」

「よろしゅうございます。親御さんや御親類の身になったら、逆磔さか刑にしても飽き足らねえと思召すでもございませうが、どんなむごい仕置きをしたからと云つて、死んだ若旦那が返るといふ訳でもございませぬから、これも何かの因縁と思召して、和吉の後始末は

まあ好いようにしてやって下さいまし」

「重ね重ねありがとうございます」

「だが、旦那、このことは無論内分にいたしますが、江戸中にたった一人、正直に云つて聞かせなけりやあならない者がございますから、それだけは最初からお断わり申して置きます」と、半七は男らしく云つた。

「江戸じゆうに一人」と、十右衛門は不思議そうな顔をした。

「この席じやあちつと申しにくいことですが、下谷にいる文字清という常磐津の師匠です」  
和泉屋の夫婦は顔を見あわせた。

「あの女も今度のことについては、いろいろ勘違いをしているようですから、得心とくしんの行くように私からよく云つて聞かせなけりやあなりません」と、半七は云つた。「それから余計なお世話ですが、若旦那のお達者でいるあいだは又いろいろ御都合もございましたろうが、もう斯こうになりました上は、あの女にもお出入りを許してやって、ちつとは御面倒を見てやって下さいまし。あの年になつても亭主を持たず、だんだん年は老とる、頼りのない女は可哀そうですからねえ」

半七にしみじみ云われて、おかみさんは泣き出した。

「まったくわたしが行き届きませんでした。あしたにも早速たずねて行って、これからはきょうだい姉妹 同様に付き合います」

「すつかり暗くなりました」

半七老人は起つて頭の上の電燈をひねつた。

「お冬はその後も和泉屋に奉公して、それから大和屋のなごうど媒妁で、和泉屋の娘分ということにして浅草の方へ縁付かせました。文字清も和泉屋へ出入りをするようになった、二、三年の後に師匠をやめて、やはり大和屋の世話で芝の方へ縁付きました。大和屋の主人は親切な世話好きの人でした。

和泉屋は妹娘のお照に婿を取りましたが、この婿がなかなか働き者で、江戸が東京になると同時に、すばやく商売替えをして、時計屋になりました、今でも山の手で立派に営業しています。むかしの縁で、わたくしも時々遊びに行きますよ。

八笑人でもお馴染みの通り、江戸時代には素人のお座敷狂言や茶番がはやりまして、それには忠臣蔵の五段目六段目がよく出たものでした。衣裳や道具がむずかしくない故せいもありましたろう。わたくしもよんどころない義理合いで、幾度も見せられたこともありまし

だが、この和泉屋の一件があつてから、不思議に六段目が出なくなりました。やっぱり何だか心持がよくないと見えるんですね」

## 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：湯地光弘

1999年5月10日公開

2012年6月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

## 勘平の死

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>